

## ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その十三）

海老沢 敏

### 九、ルソーの夢変奏（承前）

《揺り籠讚美歌》のテキストの作者は、英語讚美歌作者としてその歴史に名高いアイザク・ウォッツ（一六七四——一七四八）である。《ウォッツ博士》の名で知られ、かつ《英語讚美歌の父》と称されるこの詩人は、フランスのユグノー教徒系の母親をもち、彼女は聖バルテルミーの大虐殺の折に、英国に難を避けた家系に属していた。サザンプトンに生れたウォッツは幼ないころからラテン語の詩を作り、古今の語学に才能を発揮したといわれ

る。旧来の詩篇歌による礼拝に満足しえなかつた彼は、長じてから無数の珠玉のごとき讚美歌を作り、《英国に現われた最初の、そして最大の讚美歌作家》<sup>(註4)</sup>と言われるにいたつたが、病弱かつ風手に精彩なく、五尺ほどの短身であつたと伝えられる。彼が作つた讚美歌は六百ほどにのぼり、そのうちの二十篇ほどは邦語でも歌われ親しまれてきたものであつた。たとえば邦語讚美歌第百二十九の《さかえの主イエスの十字架をあふげば》などを挙げるこ

とができるだろう。

(注4) 津川主一著《讀美歌作家の面影》(教文館・昭和十六年(再版)、八二ページ)

このウォッツは「小児のための讀美歌を創始した人」<sup>(注5)</sup>ともいわれている。生涯、家庭というものを持つ仕方わせには恵まれなかったウォッツは、こうして幼な児たちのために、神をたたえる歌の数々を残したものであった。そうした作品の中で、とりわけ名高い詩こそ、彼の死後に、《グリーンウィル》の旋律を与えられ、十九世紀の英語圏のもっとも典型的な《揺り籠讀美歌》として親しまれていったのだ。第二節および第三節も訳出しておくべきであらう。

お前の揺り籠はやわらかくて気持がよいけれど

お前の、救世主のお休みになるところはお粗末でかたい

御誕生のところは既だったし

干草がそのとてもやわらかいベッドだった

ああ、不思議な物語を物語り

彼の敵たちが、彼らの王をどんなに罵り

彼らが栄光の主をどのように殺したかを知ると

歌いながら私は腹を立てる

しーっ！ 私の子供、私はお前を叱りはしなかった

私の歌はともかたく見えるけれど

お前のお母さんはお前の傍に坐り

その眠はお前を守っている

お前は主を知り、主を怖れることを学び

生涯主を愛し、主にお仕えるのだ

そして永遠に主のかたわらに住まい

主の愛を語り、主の讀美を歌うのだ

(注5) 津川主一著、前掲書八七ページ。

《フランクリン・スクエア歌曲集》の編集者マッカスキーは、この《揺り籠讀美歌》に注釈を加えて、次のように語っている。

「子守歌——さる現今の著者は次のように語っている。子守歌、あるいは私の子供たちが好んでそう呼ぶように、眠り歌の主題は、けっして平凡なものではないし、《求む——子守歌》と題されたさる記事に私の注意が惹きつけられるまでは、私は英語では子守歌には不足していないものと想像していたのだった。私の蔵書の中には、フランス語でもドイツ語でも、また英語でもこうした《眠り》

世界中の家庭で人気のあった子守歌であった。<sup>(注6)</sup>

(注6) 《Franklin Square Song Collection》二三ページ。

歌や夢の歌が沢山あったので、眠れない子供をなだめたり、気むずかしい赤ちゃんを慰めたりすることで困ることはけっしてなかった。私にとって眠り歌、あるいは子守歌の極致は懐しくも善良なウォッツ博士の《揺り籠讚美歌》である。節は歌詞ともども私に伝えられたが、それは幼な児の眠りの中で私の疲れた眼が答え、それによって落ち着きもなく苦しんでいた私の気むずかしい悩みが慰められたものだった。私はかつて、これを自分の子供たちに使ってみたが、眠たい時間のコンサートのはじめに歌われるものがたとえなんであつたにしても、最後はもちろんへしーっ！いとしい子、静かに横になって、おやすみであつた。私がほんとに幼ないころに、第二節の最後の二、三行が歌われたとき、小さな脚輪つき寝台に横になった私の幼な児のような心に与えられた印象は、けっして満すことのできないものであつた。しばしば、私はあまりの感動で、それらの歌行をそつと歌い、次の詩節をもつと大きな声で、しかもはつきりと歌って、そうした悲しみの感情を少しは追い払ってくれるように頼んだものであつた。最終節をしめくくる二三行は、かつては、幼な児の頭に降ってくる祝福のことばのように思われた。この、私自身ならびに子供たちにとつての《歌の中の歌》が結ばれた曲は、やさしくも悲しげなものであつて、歌詞によく合つていた。それは長い間英語を話す

マッカスキーは、この曲をさらに「連想によつて私には神聖なものである」と語っているが、ウォッツ作詞のこの幼な児のための讚美歌が、《ルソーの夢》の旋律によつて、十九世紀にはひろく親しまれ、母親の愛情深い親密な声によつて歌われ、彼女たちのいとしい幼な児たちの耳に、そして魂の中に深く染み入つていったことが理解されるのである。

神の祝福、主イエスのやさしい慰めは、幼な児の心の中に、この《ルソーの夢》のひびきのかたちで、深く刻み込まれたものであつたが、さらにそれにとどまるものではなかつた。人びとの心に刻みつけられるその様態は、さらに多様なものであつた。幼な児の心に記憶されるものが《子守歌》だとすれば、民衆の心に刻みこまれるのは、ほかならぬ民謡であり、そしてまた嬰兒の年齢を越えた子供たちの肉体と心を捉えるのは遊び歌、遊戯歌である。《ルソーの夢》は、英語圏の民衆たちとその子供たちによつて、こうした初源的な歌としてもひろくひろまっていたものであつた。その二、三の実例をここで紹介してみよう。

アメリカ合衆国に移住した英語系の人たちのあいだでひろく歌われていた歌に「タバビーおばさん」に言つといで、灰色の年寄りガチョウが死んだつて」という歌がある。これは「タバビーおばさん」のかわりに、「ナンシー」、「ロージー」、「ロディー」、「ヘビー」、「パツィー」等々とそのシーンに応じた固有名詞を入れかえることができるが、いすれにしても、アメリカ東部を斜めによぎるアラチア山脈の山地に生きる住民たちが好んで歌い楽しんでいたのであつた。こうした遊戯歌は、一九三〇年代にさまざまなたちで採集され、当時の文献類に収められている。

そのひとつはジョージ・パレン・ジャクスン著「南部高地の白人靈歌」(一九三三年)に収められている。(譜例③)

(注) George Pullen Jackson「White Spirituals in the Southern Uplands. The Story of the Fasaola Folk, their Songs, Singings, and "Buckwheat Notes". (Chapel Hill, The University of North Carolina Press, 1933.) 一七三頁。

著者は、その「この「タバビーおばさん」に言つといふ Go tell Aunt Tabby」が流行のタイプのひとつであり、南部では、歌い手も、また歌手でなくても、みんなこの節を知っているようだ

と語っている。著者はさらに、

この節の作曲家がルソーとされているが、それはほかならぬジャン・ジャックであり、事実、さる著者はこれをその伝統的な名前の「ヘルソーの夢」で名指している」と指摘するのだ。その上で、さらに別の著者による讚美歌史では、この旋律が J・B・クラマーなる人物によつて「つかまえられ」、「一八一八年ごろ、変奏曲つき」のピアノ独奏曲として(おそろくは英語で)出版された」と訂正されているのである。ジャクスンはクラマーがこれをどこで「つかまえた」のかわかれば面白いと語っているが、

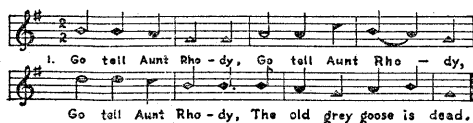
▼ 譜 例 ③

Go tell Aunt Tab - by, go tell Aunt Tab - by,  
The one she was sav - ing, the one she was sav - ing, The

Go tell Aunt Tab - by the old grey goose is dead,  
one she was sav - ing to make a feath - er bed.

## GO TELL AUNT RHODY

*Verses selected and tune written down by Richard Chase*



譜例 ④

2. The |one that she's been |saving (3 times)  
To |make a feather |bed.
3. |She died in the |mill-pond  
|Standing on her |head.
4. The |goslings all are |cry-en  
To |think their mother's |dead.
5. The |gander is a- |mourn-en  
Be- |cause his wife is |dead.
6. The |barnyard is a- |weeping  
|Waiting to be |fed.

この《ルソーの夢》から導き出された《タビーおばさんに言っ  
いで》は、さらにいくつかの稿で歌われていたらしい。<sup>(注8)</sup>

(注8) 前掲書、一七四ページ。

同じく一九三〇年代に、この民謡化し、遊戯歌化した旋律を採  
集したのはリチャージ・チェイスであった。

チェイスの編集した《昔の歌と歌唱遊戯》<sup>(注9)</sup>は、その冒頭に、《ロ  
ディーおばさんに言っでおいで Go tell Aunt Rhody》を掲げ  
ているが、さらに歌詞の異稿を六つほど示している。(譜例④)。  
いずれもガチョウの物語である。(図版①)

一、ロディーおばさんに言っといで

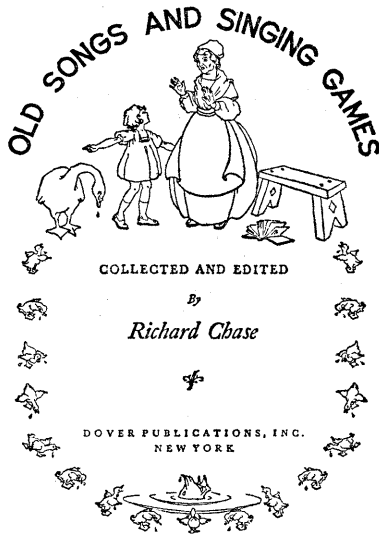
灰色の年寄りガチョウが死んだって

二、助けてやったあのガチョウさ

羽入りベッドを作ろうと

三、そいつは貯水池で死んだ

目の前の貯水池で



六、納屋のまわりの庭しゅうが泣いている  
餌をまちながら

(註) Richard Chase (Collected and Edited by) 《Old Songs and Singing Games》 (Chapel Hill, University of North Carolina Press, 1938; [新版] New York, Dover Publications, 1972.)

チェイスは、この歌が、貧富を問わず、また町の人たちも田舎の人たちも、すべてのアメリカ人家庭でよく知られていたものであり、しかも、自分たちアメリカ人の大部分が、この節につけられたへいとい子よ、ねんねしな」といった歌詞ともども、先に紹介した歌詞の最初の二節ほどで眠入ったものであったと回想するのである。そのチェイスは、この旋律が讚美歌としても用いられ、讚美歌としては《グリーンヴィル》ないし《ルソーの夢》として知られていたものであること。それが一七五〇年(ノ)にジャン・ジャック・ルソーが書いたさるオペラで用いられていたこと。ルソーが夢で天国へと連れてゆかれ、そこで彼は天使たちが神の玉座のぐるりにたちながらこの節を歌うのを聞いたといわれていると語っていることは、今さらくりかえして説明するまでも

四、ガチョウの子供はみんな泣き叫んでる

お母さんが死んだと思って

五、ガチョウの雄は悲しんでる

カカアが死んじまったんで

ないだろう。彼はこの《ロディオーおばさんに言っといで》のページを次のように結んでいる。「この単純な旋律のはじまりがなんであろうとも、それはこうした詩句でそれを用いることで、私たち自身の口伝えの中で私たちに親しいものとなったのである。」<sup>(注10)</sup>

歌》としての《ルソーの夢》の命運を語る前に、しかし、もうひとつ別のかたちの《ルソーの夢変奏》について、つけ加えておく必要があるだろう。  
(つづく)

(国立音楽大学)

(注10) 前掲書、三ページ、四ページ。

私たちは、こうして、《ルソーの夢》が、そうした本来の名称を離れながら、讚美歌から、さらに地上の天使たちのための歌、そしてさらには、子供たちの生活の歌、遊戯の歌として、そのおだやかな旋律線のもつ不思議な魔力の呪縛をつよく保ちつづけるが、変容し、生きつづけていったことを知るのである。それは英国から、さらにその言葉が力づくよく生きつづけていった新大陸アメリカへともたらされながら、さらに新しい生命力を獲得していったものである。

それでは、この《ルソーの夢》はそうした不思議な変身を経験するにとどまったものであろうか。この旋律は、さらになお、意識的な教育実践の場で、子供たちの肉体と心を導く歌として、身体運動と、そして魂の動きをひとつに結びつける印象深い音楽としても積極的な位置づけを与えられるのである。そうした《遊戯

\*

\*

\*